



お絵かきを楽しむC児たち



指で潰して色を付けるB児



硬い実(サルナシ)で潰すA児



A児の潰し方をじっと見る友達



見つけた桑の実



「じやも園、楽しんでよー!」

協力園 如水こども園

(幼児の実態)

A児は、2歳の終わりまで海外で過ごし、5月から日本での生活が始まりました。本園には、1ヶ月経った6月からの入園です。外国語の会話で育ってきたA児は、園生活で保育者や友達の話している言葉が分かりません。また、今までとは違う環境に慣れないせいか、部屋に入ることを嫌がり、食事も進まない状況です。保育者との信頼関係を築くことはもちろん、子ども同士のつながりも含めて、A児への関わり方をクラスで考えていくことにしました。

こども園の入り口に続くアプローチには、桑の木やサルナシ等、様々な種類の植木があり、日差しの強い日は遊びの途中でも、木陰のベンチで涼むことができます。また、園庭は、体を十分に動かして遊べるような場となっており、子どもたちが駆け上がったたり、降りたりできる大小の築山もあります。こども園の隣には児童クラブの園庭があり、小学生が学校に行っている間は、園児がいつでも利用できる場となっています。今までのA児の遊んでいる様子から、どちらかというと、児童クラブの園庭を気に入っているように感じられました。

児童クラブの園庭に遊びに行くと、年長児が桑の実を木から取って食べたり、落ちている実の汁を手につけたりして遊んでいました。年長児の手は、桑の実の汁の色で濃い紫色になっています。A児は、年長児の遊ぶ様子を見ていました。a先生は、落ちていた桑の実を見つけ、A児に見せました。A児は、a先生の手についていた桑の実の色に気付くと、自分の指を使って、a先生の手の中の実を潰しました。A児は、2人の手が、桑の実の濃い紫色になると、a先生を見てニコッとしました。この後も2人で桑の実を探し、指で潰して遊びました。部屋に入る時、桑の実色になった手を見て、A児とa先生は笑い合いました。

お迎えの時に、A児が桑の実を潰して楽しく遊んだことを母親に伝えると、母親では、近所の子どもたちが土や木の実を潰して遊んでおり、A児もまた、木の実を潰して遊んでいたと話してくれました。そして、A児が母親で遊んでいたという木の実の潰し方を母親から教わり、遊びの中に取り入れることにしました。次の日、担任のb先生は、母親から教わった遊びができるよう、すり潰す木片を準備しておきました。A児が登園すると一緒に桑の実を集め、朝の集まりでA児のしていた遊びを友達に紹介しました。児童クラブの園庭に着くと、A児はお気に入りの場所です。b先生が準備した木片の上で、指を上手に使って黙々とすり潰します。友達が一人、二人と寄って来て、潰し方をじっと見えています。ぶるさとの遊び方を思い出したのでしょうか、A児はポケットから取り出したサルナシの硬い実で、桑の実潰しを始めました。見ていた子どもたちも、A児の真似をして潰してみると、A児と同じように色が出ました。A児は、近くにいたb先生と友達の顔を交互に見て、嬉しそうな表情をしています。

その次の日も、桑の実潰しに興味をもった子どもたちも、A児の遊んでいる所にやってきました。手で潰す子どももや、硬い実の代わりに小石で潰してみる子どもも、枝で潰す子どもも、色の出し方は様々です。そこにb先生が白い紙を持って来ると、B児は、紙の上に桑の実を置いて、指で実を潰して、そのまま指を動かします。右手、左手、指の動きに合わせて色が付いていきます。指の動きで線ができていく楽しさを感じているようです。C児たちは、白い紙の上に描かれる桑の実の色を見ています。以前、花びらをビニール袋に入れて、綺麗な色を出していた遊びを思い出したのか、やりたそうにしています。手に色が付くことが苦手のようです。b先生が実を潰して色を作っていました。C児たちは、手が汚れないように枝を使って、お絵描きを始めました。遊び方は様々ですが、A児と先生たちの見つけた桑の実潰しの遊びが数日続きました。

この遊びをきっかけに、A児はだんだんと自分の部屋に入ることができるようになりました。部屋を移動する時などは、a先生に自分から付いて行くことが多くなりました。保育者との信頼関係を築きながら、園の生活にも慣れてきたように感じられます。A児は、園生活を楽しむ中で、身近な保育者と関わる心地よさを感じ、友達と関わりたい気持ちが高まっています。友達のよさを感じながら、親しみをもちて生活していくことを期待します。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 「10の姿」

- 豊かな感性と表現
健康な心と体
自立心
社会生活との関わり

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

事例から見られる10の育ち

自立心
A児は、ふるさとの遊びを思い出して、保育者と楽しんだことで自分の居場所を見つけたと思われる。さらに、A児は友達が自分の遊びを見ていることに気づき、友達に自分の遊び方を教えたが、友達に自分の遊び方を教える方法で表現した。また、友達が真似してくることで、一緒に遊べる楽しさを感じたのではないだろうか。A児は、保育者との信頼関係を基盤に自己を発揮し、身近な環境に主体的に関わる経験をしていると捉えられる。
これからの園生活の中で、発達に応じた経験を重ねながら、自分の力で行うために考えたり、工夫したりして、諦めずにやり遂げようとする、5歳児後半の姿につながると考えられる。

事例から見られる10の育ち

社会生活との関わり
保育者は、年長児の様子をじっと見ているA児の気持ちを汲み取り、思いが実現するように保護者や保育者同士の連携を図った。これにより、A児は自分の知っていた遊びを友達と一緒に楽しむ、保育者や友達と安心して関わっていた。
A児は、『家庭』から『こども園』という少し大きな社会へと、生活の場を広げていったと考えられる。
自分が見守られている安心感を基に、身近な人と触れ合う体験は、人との関わり方に気づいたり、相手の気持ちを考えたりしていく経験となっていく。このような経験を重ねながら、5歳児後半頃には、親しみをもちて友達と関わり、園生活を楽しむ姿になっていくと思われる。

自立心

保育者の援助・環境構成のポイント

- 子どもの気持ちを尊重し、温かく見守り、愛情豊かに、応答的に関わる援助
言葉が十分でないことを理解し、子どもの何気ない仕草や表情から、お気に入りの場所や、子どもの興味(桑の実を潰して色を出したいこと)を感じる。
自分でしようとする気持ちももてるような環境
保護者や園の職員と連携を図り、子どもの興味を探ったり、これまでの体験を基に環境の構成をしたりする。